# 東アジア共同体にみる記憶と夢

## ―在日コリアンとコリョサラム

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
成（そん・くみ）玖美

ここ数年、東アジア共同体構想が、アジア国際政治の大きな争点になっている。その気運が高まったのは、ＡＳＥＡＮが日本・韓国・中国の三国を招待して一九九七年から始まった「ＡＳＥＡＮ＋三首脳会議」が発端であるといわれる。さらに二〇〇一年の同会議で提案された「東アジア・サミット」が四年後の二〇〇五年一二月に実現し、インド・オーストラリア・ニュージーランドが加わり、東アジア地域における「共同体」の形成に向けて協力することが確認された。二〇〇七年一月には第二回「東アジア・サミット」が開催されたばかりである。こうして東アジアにおける地域統合へ向けた議論がこの十年間に急速に進展した感があるが、その内実はしばしば「同床異夢」と揶揄されるように、一枚岩ではない。まずもって、「共同体」加盟国の枠組みが、中国と日本（と米国）の政治的対抗を背景として明確ではない。宗教の多様性の問題もある。北朝鮮や台湾が議論に参加していないという現実もある。

こうした様々な懸案事項を抱える東アジア共同体構想の実現には、日本や中国ではなく、ＡＳＥＡＮの舵取りが重要であるという見方がある。東アジアの中でも、とりわけ東北アジア地域の諸国家は経済的影響力が大きい。しかし利害の対立があまりに大きく、地域協力の大きな障害となるとも考えられるためである。

### 東北アジア「共同体」構想

一方で、とくに東北アジアでの新しい地域秩序形成に向けて、積極的な議論を展開する人々もいる。和田春樹、姜尚中らがその中心であるが、彼らは自らの構想を「東北アジア共同の家」というビジョンによって論じている。和田自身が書いているところによると、彼が東北アジアの地域協力組織の必要についてはじめに問題提起したのは、一九九〇年のことであり、ソウルで開かれた日韓の新聞社共催のシンポジウムの席上であった。ここで和田は、「民主主義を基礎とする南北朝鮮の接近・融合」による「統一朝鮮、統一韓国が東北アジアの中心」であるとし、朝鮮半島を基点とした地域協力機構「東北アジア人類共生の家」というアイデアを述べたという。[1] また姜尚中も、第一五一回国会衆議院憲法調査会（二〇〇一年三月一三日）での参考人発言を初めとして、日本が日米の二極間関係への依存から脱却し、近隣アジア諸国とのパートナーシップを構築していく道筋を、「東北アジア共同の家」構想、あるいは「東北アジアにともに生きる」という言葉によって発言している。そしてここでも構想のコアは、南北両朝鮮の和解、平和共存と統一である。[2] また、韓国の経済学者、金泳鎬による「東北アジア経済圏」の提案をはじめとして、経済を中心とした東北アジア地域統合を論じる人々もいる。[3] こうした議論は、言葉やニュアンスは違えども近代以降様々に論じられてきたテーマではあるが、九〇年代以降の新たな世界秩序の形成の中で議論し直されていることに、全く意味がないわけではないだろう。

ここでは近年のこれらの議論を一括して、東北アジア「共同体」構想と呼ぶことにする。

東北アジア「共同体」構想が、主に「朝鮮半島」の平和を要諦として論じられるのには、いくつかの理由があろう。まず当然のことながら、この構想はまさに朝鮮半島情勢の危機的状況を解決するために錬られた構想であり、はじめから議論の焦点は朝鮮半島に当てられている、という事情である。またこうした議論が、急速に文化・学術的交流を深めつつある日本と韓国の論壇を中心に展開されてきたという理由もある。そしてもう一つ指摘したいのは、この議論において主要なアクターとなっている在日コリアンにとって、東北アジア「共同体」構想には自らの社会的地位を左右する、独自の意味があるという点である。

## 在日コリアンの期待

現在に至るまで、祖国の、そして在日コリアン内での南北分断は、在日コリアンの生活に様々に影を落とし、人々の思いを翻弄してきた。そんな在日コリアンにとって朝鮮半島は、自らのルーツの地であり、かつ(個人的思い入れの濃淡はあれ)南北統一という悲願の懸けられた地である。しかし戦後六〇年が過ぎ、すっかり日本の地に根付いてしまった在日コリアンは、いまや国籍は韓国や「朝鮮」であっても、朝鮮半島両国の国民とはかなり異なる文化的特徴を持つエスニック集団となった。朝鮮半島情勢に関心を持ち、その報道に胸をふさぐ思いをしながらも、問題の当事者であると言えるほどの戦後経験を本国の人々と共有せず、本国政治への直接的関与をしにくい状況にあるのが、在日コリアンの実情である。

また血統主義の日本社会では、多くの在日コリアンが日本国籍をもたず、いまだ「国籍」による社会的排除を様々に経験している。在日コリアンは、本国にも日本にも、「国民」としての十分なシティズンシップを求め得ない立場にある。

しかし東北アジア「共同体」構想には、在日コリアンの状況を好転させる可能性が含まれていると言われている。二つの論点を紹介したい。

その一つは、EU統合がEUシティズンシップという枠組みを創出したように、東北アジア「共同体」の形成がこの地域における「国家」や「国籍」を相対化し、「共同体」内におけるシティズンシップの共通化をもたらすのではないかという期待である。こうした議論は、在日コリアンの運動の中では、一九八五年から在日コリアンの和合と南北統一を目指す「ワンコリアフェスティバル」を開催していた鄭甲寿によって早くから示されていた。鄭甲寿はEC/EU統合への議論を見ながら、アジア地域においても同様の動きが生じることを予測し、一九九〇年の第六回フェスティバルの趣旨文に「アジア共同体」構想を記し、一九九三年にはアジアにおける市民的権利と自由の普遍的実現をめざす「アジア市民」の創出というビジョンを示していた。[4] 鄭甲寿は「アジア」というより広い地域を想定して論じていたが、その内実は現在の東北アジア「共同体」構想を先取りしたものであったといえる。

また第二の論点として、東北アジア地域におけるコリアン・ネットワークの中に在日コリアンを位置づけ、在日コリアンがこの地域で果たしうる可能性を拡大的に捉えようとする期待がある。例えば朴一は、一九九一年三月号の『経済評論』上で、「中国にいる朝鮮族、ソ連の朝鮮族、北朝鮮、韓国、さらに在日韓国・朝鮮人を合わせれば、華僑経済圏に対抗し得る潜在能力を、韓(朝鮮)民族は持っていると思います」と指摘し、東北アジア経済圏におけるコリアン・ネットワークの可能性を示唆した。[5]

また姜尚中も「それぞれのホスト社会の中で定着して生きているコリアン系のマイノリティーの歴史やつながりは、東北アジア地域の将来を考えていくときに、非常に重要である」と言い、「コリアン・ネットワークという、東北アジア地域にまたがる広がりの中に「在日」を位置づけ直してみることで、その可能性はより大きくなっていくはずである」と述べる。[6]

## ディアスポラの記憶と、つながりあう夢

ここで朴一や姜尚中がいう「コリアン・ネットワーク」を理解するためには、近代における朝鮮半島から東北アジア各地への、朝鮮民族のディアスポラの歴史を知る必要がある。

その初めは、一八六〇年代、出稼ぎ目的で朝鮮北部から豆満江を渡り、満州や極東ロシア(沿海州)へ流入した人々であるとされる。さらに天災による飢饉や、李朝の農民搾取、日本の植民地支配により、農民生活の困窮は深刻化する。それに伴い国境を越える人々の数は増加の一途をたどり、やがて人々は、そこに土地を開き、各地に定着したのである。[7] 満州、つまり中国東北部に定着した朝鮮人たちは、現在では「中国朝鮮族」として中国少数民族の一つに数えられ、その数は約二〇〇万人にのぼる。

一方、ロシア極東に定着し生活を築いていた朝鮮人たちは、一九三七年、中央アジアへの強制移住という悲劇に見舞われる。ときの指導者スターリンは、同年の日中戦争開始による日本軍のロシア極東進軍を懸念し、その際に日本人と容貌が酷似する朝鮮人が日本軍のスパイとして利用されることをおそれた。それはスターリンがおこなった、チェチェン人をはじめとする周辺民族追放の歴史の中の一幕である。朝鮮人たちは列車に乗せられ、中央アジアへと運ばれ、そして荒野に放り出された。生まれ育った場所から根こそぎ切り離された朝鮮人たちは、そこでまた痩せた土地を開き、生きる場を築いていくのである。彼らは自らを、朝鮮語で「コリョサラム(高麗人)」と呼ぶ。その数、約五〇万人。

さらにコリョサラムたちは、近年、新たな苦難を経験している。ソ連崩壊後、カザフスタンやウズベキスタンなど中央アジア諸民族が独立を果たす中、ロシア語しか離せないコリョサラムたちには住みにくい社会となっているのである。そんな中、極東へと帰還する人々が増え、現在では数万人が望郷の地で、また一から出直しの生活を始めているのだ。

こうしてみると、在日コリアンの歴史、つまり朝鮮半島から日本へと渡った人々の流れが、近代朝鮮民族のディアスポラの一派であることが理解されよう。生きる場を求めて、半島北部からは中国やロシアへ、半島南部からは日本へと流浪した人々の動態が、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、この東北アジアの地で大きく展開されていたのである。

戦後の在日コリアンはこうした大きな地図の中での自らの位置確認に自覚的ではなかった。地政学的視野を日本海／東海を挟んだ朝鮮半島と日本の範囲に限定し、日本・韓国・北朝鮮の三国の中に自らを規定する傾向が強かった。しかしそうした思考の枠組みが、かえって歴史認識の硬直化をもたらし、自らを国民国家の論理に封じ込める閉塞感の原因ともなってきたのではないだろうか。

しかし、ディアスポラの記憶をたどり、東北アジアという地理的広がりの中で在日コリアンが自らを規定し直すとき、この地で生きる新たな意味が見えてくる。東北アジアの同胞と出会い、互いにネットワークをつなぎあおう。そして朝鮮半島の、さらに東北アジア全体の発展や安定に寄与しよう。トランスナショナルな存在であるからこそ、東北アジアに生きるコリアンであるからこそ、

できることがあるのだ、と…。在日コリアンはそんな夢を、東北アジア「共同体」構想に見ているのである。

## 記憶の向かう先

さて、こんなふうに書いてきたところで、ふと疑問が頭をもたげる。東北アジア各地に散らばったコリアンたちは、それぞれの国で、それぞれに生活を築き、それぞれの文化を創ってきた。朝鮮語もそれぞれに変化したし、在日コリアンとコリョサラムの多くは朝鮮語を離せない。そんなコリアンたちが、今、「民族的出自」という共通項によって再びつながりあうことは、可能なのだろうか。同胞であるという懐かしさはある。お互いそれぞれの国でマイノリティとして生きてきたという連帯感もあるだろう。しかしそれより先に進むには、まだ大きな壁がある。何より、お互いのことを知らなさ過ぎるのだ。

在日コリアンとコリョサラム、この近くて遠い存在のかすかな糸をつなぎ、東北アジアにおけるコリアン・ディアスポラの歴史を私の前に広げて見せてくれたのは、姜信子の一連の仕事であった。『棄郷ノート』(二〇〇〇)で植民地支配下の親日作家の東北アジアでの足跡と「転向」の物語を描いた姜信子は、『追放の高麗人』(二〇〇二)、『ノレ・ノスタルギーヤ』(二〇〇三)において、コリョサラムの記憶、そして彼らが日本の歌とは知らずに歌い継いできた「天然の美」の歌の記憶をたどって、再び東北アジアを巡っている。それは、「国家」や「国民」や「民族」の歴史の中では語ることを封じられていた人々の、切ない記憶をたどる旅である。そこには、運命の大きな流れに翻弄されながらも、その地点から生を立ち上げ、日々を重ねて明日へと命をつないでいく、そんな人間の悲哀としたたかさが表現されている。

「どこから来たのか。何者なのか。というような、現在をまるで過去からの終着点とするような言葉ではなく、どこに行こうか、どう生きようかと、人は何よりもまず、始まりのことばを探し求めている。…(中略)…誰かに与えられる筋道立った結論で飾られた正しい歴史の物語ではなく、きれいに整理されようもない迷いや夢が織り成す始まりの物語こそが、私たち人間の生のありか。そう思えてならないのです。[8]」

そんな彼女の言葉に思いを寄せながら東北アジア「共同体」構想をみるとき、そこに一抹の落とし穴が透けて見える。コリアン・ネットワークをつなぎあいながら、それが再び「民族」という大きな物語の中へと回収されていくだけだとすれば、それは新たな民族主義を生むに過ぎないのではないのだろうか、と。

果たして、呼び覚まされたコリアン・ディアスポラの記憶は、どこへ向かうのだろうか。そして私たちは、東アジア共同体構想に、どんな夢を見るのだろうか。

### 注

(1) 和田春樹『東北アジア共同の家―新地域主義宣言』平凡社、二〇〇三、一五―一八頁。
(2) 姜尚中『東北アジア共同の家をめざして』平凡社、二〇〇一。姜尚中『在日』講談社、二〇〇四。
(3) 和田、前掲書、一八―二〇頁。
(4) 鄭甲寿『〈ウンコリア〉風雲録―在日コリアンたちの挑戦』岩波書店、二〇〇五。
(5) 和田、前掲書、一八―一九頁。
(6) 姜尚中『在日』、二一三頁。
(7) サヴェリエフ・イゴリ「極東ロシアにおける朝鮮人社会の形成と発展(一八六〇―一九一七年)および、孫春日「中国朝鮮族における国籍問題の歴史的経緯について」(櫻井龍彦編『東北アジア朝鮮民族の多角的研究』ユニテ、二〇〇四所収)。
(8) 姜信子『ノレ・ノスタルギーヤ』岩波書店、二〇〇三、二一―二二頁。

### 参考文献


・大矢吉之・古賀敬太・滝田豪編『EUと東アジア共同体』萌書房、二〇〇六。
・姜信子『棄郷ノート』作品社、二〇〇〇。
・姜信子『追放の高麗人』石風社、二〇〇二。